

短期海外研修の効果を上げるための取組

—長崎県立大学国際情報学部国際交流学科の場合—

Measures for Effective Short-term Study Abroad: Case Study of the Department of Intercultural Relations and Cross-cultural Communication at the University of Nagasaki

元 長崎県立大学国際情報学部教授 山内 ひさ子

YAMAUCHI Hisako

(Former Professor, Faculty of Global Communication, University of Nagasaki)

キーワード：短期海外研修、事前・事後学習指導、海外留学プログラム

1. はじめに

大学に「グローバル人材育成」が要請されている今日、異文化理解力の養成がグローバル人材の要素の1つになっている¹。学生の異文化理解力を養成するには、海外留学や短期海外研修による実際の海外体験や、留学生や在日外国人との交流などを通して養成することが考えられるが、文部科学省の「グローバル人材育成推進事業」等の影響もあり、海外留学や海外研修を必修化する学部・学科が増えてきている。しかし、高額な費用を要する海外留学や短期海外研修の効果について、対費用効果を数値ではっきりと示したものはまだ少ない²。

長崎県立大学国際情報学部国際交流学科(1学年の定員は80名)の海外研修は、平成11年に長崎県立女子短期大学が4年制大学へと移行されて以来³、選択科目として開設されていたが、平成25年度入学生からは3~4週間の短期海外研修が必修化された。筆者等は短期海外研修を必修化するにあたって、(1)学生の安全の確保、(2)経費に対する支援制度、(3)海外研修の効果を上げるための方策、の3つの取組を行ってきたので、この論考ではその取り組みとその成果を報告する。

2. 短期海外研修の必修化の意味と問題点

「海外研修」が選択科目である場合と必修科目の場合で大きな違いがある。選択科目の場合、大学

が提携している研修機関に研修参加希望者が申請を行い、研修に参加し、研修参加の証明を大学へ持ち帰ることにより単位取得ができる。しかし、必修科目の場合、学生は①卒業するためには必ずこの科目の単位を取得しなければならない。そのため、②学費に加え、研修にかかわる費用を準備しなければならない。これら2つの要件は、心身の健康状態により「海外研修」に参加できない学生への対応と、参加費用が準備できない学生への対応措置を大学が備えておく必要があることを意味している。また、③研修先における教育内容の検討のみならず、④海外研修のための学内の指導体制の整備も必要である。さらに、⑤研修への出発時から終了帰国時まで、学生の安全対策も必要となる。加えて、⑥海外研修の成果が求められる。上記の(1)の取組に関する問題点は①③④⑤である。また、(2)に関する問題は②である。(3)に関する問題は④と⑥である。

3. 学生の安全確保への取組

「海外研修」の必修化で一番心配なのは、いかに研修中の学生の安全を確保するかである。この点については、大学ができることとできないことがある。たとえば、天変地異やふつう想定できない突然の事故などは大学では対応できない。しかし、学生への指導や研修機関の選定により、学生の安全をある程度は保つことが可能であると考えられる。したがって、問題点⑤の海外研修への出発時から帰国までの学生の安全確保については、交換留学・海外研修の危機管理規定及びマニュアルの策定を大学に依頼した。長崎県立大学では原則として教員が海外研修の引率を行わないが、万一の場合は、教員または職員が現地に向かい対応するための予算の確保も依頼した。また、参加学生には海外旅行保険を掛けることを義務付けた。問題点③の対策として、研修教育機関の教育内容はもちろん、どのような地域環境に位置するのか、どのような支援スタッフを揃え、支援体制を整えているのかを筆者を含む教員と国際交流センターの職員が実際に訪問・視察して研修教育機関を選定した。

これらの学内の危機管理制度の確立と研修教育機関の選定に加え、問題点④への対応としての学内指導では、「海外研修」に事前・事後学習を含むシラバス(資料1を参照)を作成し、担当教員を割り当てるとともに、事前学習時に教員と国際交流センターの職員による安全指導を行っている。具体的には、前年度の参加学生対象のアンケート調査⁴で後輩への助言を求め、参加学生にその内容を紹介している。さらに、研修教育機関のスタッフとの協議の時に得られた情報をもとに、安全確保への注意を喚起している。平成26年度には大手旅行社のロスアンジェルス支店の元顧客部長による講演会を開催し、各学生の安全確保の自覚を促した。

平成23年度以前は国際交流学科の海外研修への参加者は毎年十数名であったが、支援金の拡充もあり、平成24年度は32名、平成25年度は24名、平成26年度の夏休みは41名が参加した。加えて、3月20日現時点で6名が参加中である。これまでのところ、幸い学生の安全に関する大きな問題は生じていない。

4. 経費に関する支援制度

海外研修に必要な経費として、学生は小遣いやお土産代を除いても20～70万円を準備する必要がある。筆者は必修科目として単位を授与するのであれば、大学が費用の一部を負担するべきであるという考えから、大学が一定の条件（第1外国語が英語の学生であればTOEIC 550点以上、中国語であれば中国語検定試験2級以上）を満たした学生には支援金を出すことを提案し、平成24年度から表1のような支援金制度に拡充された。これにより、取得条件を満たし、支援金をもらって研修に参加することを学生に奨励することが可能となり、学生のモチベーションも高まっている。

表1. 短期海外研修地と支援金(国際交流学科の学生の場合)⁵

研修機関の国	研修経費(研修機関の教育・教材費、宿泊費、旅費などを含む)	支援金
イギリス	65～70万円	20万円
カナダ	40～45万円	15万円
アメリカ合衆国	45～55万円	15万円
オーストラリア	40～45万円	15万円
シンガポール	40～45万円	15万円
中国	20～25万円	8万円

しかし、支援金を受けたとしても、学生は15万円～60万円程度の費用を準備する必要がある。長崎県立大学は公立大学であることもあり、必ずしも経済的に余裕のある家庭の学生が入学してきているわけではなく、学費や生活費をアルバイトで賄う学生も多い。また、在学中に家庭の経済状況が急激に悪化する学生もいる。そのような学生にとって、海外研修のための費用を確保するのが難しいケースが予想される。平成26年度の時点では、まだ必修化された学生が卒業年次に至っていないため、経費負担が困難な学生対象の最終的な経費支援制度の決定はなされていないが、27年度中に確立する必要がある。また、心身の健康状態により海外研修に参加できない学生への対応措置についても、27年度中に確立する必要がある。

5. 海外研修の効果を上げるための取組

海外研修については、対費用効果が少ないとの批判が多い。山内(2008)が九州・沖縄地区の大学の教員対象に行った海外研修の調査によると、短期の海外語学研修は「語学学習のモチベーションを上げる以外は期待できない」という結果であった⁶。しかし「海外研修」を必修化した場合、

語学学習へのモチベーションの向上以上の効果が期待されることになる。

5.1 海外研修・留学の成果と阻害要因と対策

Kinginger (2009、2013)は海外研修や交換留学は言語能力と異文化理解力の両面において効果があったと結論している。特に「言語の適切な運用能力」に大きな効果があると説明している。しかしながら、Kinginger はこれらの能力の向上を阻害する要因として、次の3つの問題点も指摘している。

①海外研修・交換留学中に学生の両親 (helicopter parents と呼んでいる)、兄弟姉妹、友人、恋人や知人などが研修地へ本人を絶え間なく訪問する場合、②IT技術の発達とインターネットの普及により、学生が母国情報のネット検索やSNSによる母国の両親、兄弟姉妹、友人、知人とのやり取りで一日の大半を費やす場合、③研修機関での授業以外は自国出身者と母語を使って集団行動を行う時間に当てる場合。

①のケースは3~4週間という短期の海外研修の場合はほとんどないであろう。しかし、教員が引率する場合は、教員がどの程度学生にかかわるかにより、両親、兄弟姉妹、友人、知人の役割を果たすことになりかねない。その意味でも、国際交流学科では学生の海外研修に教員が原則として引率しない方針を取っているため、学生自ら積極的にコミュニケーションを図る必要性が生じている。とはいえ、教員が全く関与しないのではなく、必要に応じて引率を行う場合や、研修中に1、2日研修状況の視察をしたり、研修期間終了後に研修機関を訪問し、学生の状況を直接現地スタッフから聴取している。

②のケースについては、教員が歯止めできるものではないが、事前学習時にSNSの多用・乱用についての注意を喚起している。インターネット利用に関しては、事前学習時に研修先の国や地域の基礎知識を得るというように、有効利用を指導している。

国際交流学科の学生全員を同じ研修教育機関に派遣すると、高校までの修学旅行と同じであり、団体行動となるため、一つの教育機関への派遣人数を15名以内に制限している。そのため、研修教育機関の新規開拓が必要となった。まず、学生へのアンケート調査を行い、研修希望地を調査した。その結果、短期海外研修希望地としては、希望が多い順に、イギリス(21%)、カナダ(20%)、アメリカ(19%)、オーストラリア(13%)、韓国(9%)、中国(7%)、その他の国(11%)であった。そこで、平成23年度には、すでに提携教育機関であった2機関を含む14機関を訪問視察し、研修機関とその地域の状況を視察するとともに、担当者との協議・フィールドワーク先の視察などを行った。そして新たにイギリス1機関、アメリカ3機関、オーストラリア1機関、シンガポール1機関を研修教育機関とした。このように、研修機関が増えたことにより、学生の選択が広がるとともに、多人数の学生を一つの研修教育機関に派遣しなくてもよいようになった。すなわち、③のケースについては、学生同士が集まって日本語で話す機会をなるべく減らすようにしている。また、他の国からの研修参加者

と共に研修が受講できるようなプログラムがあれば、そちらへ参加できるように指導し、本学科の学生が集団行動を取りにくい環境を作るようにしている。

5.2 言語能力向上への取組

海外研修による言語能力への効果をどのようにして計り、その成果を数値により示すことができるかという点は大変難しい。学生が研修教育機関においてどのような教育を受け、どのような体験を行ったのかにも左右されるからである。特に短期の海外研修の場合、3～4週間の海外体験の前後により、どの程度の言語力の向上が見られたのかを厳密には測定していないが、次の2つの取組は、参加学生の語学力の向上につながっていると考えられる。1つ目は経費の支援制度で支援金の受給者をTOEIC 550点以上の取得者と条件を付けたことである。2つ目は事前・事後学習指導である。

前述の表1に示した支援制度により、支援金を受けるために学生の英語学習に励みがついている。また、特に平成24年度からTOEIC対策を行う科目を開設し、卒業要件にTOEIC 550点以上の取得を加えたこともあり、平成24年度以降入学の学生にTOEICの平均点の向上が見られる。表2は平成24～26年度までのTOEICのテスト結果の比較である⁷。

表2. TOEIC テスト結果の比較

	1年生	2年生	3年生	4年生
平成24年度	550.3	556.6	575.0	609.4
平成25年度	553	589.9	600.8	618.6
平成26年度	534.3	589.2	612.3	620.9

このように、平成24～平成26年度まで卒業時のスコアは徐々に上昇しているが、これが海外研修によるものか、TOEIC対策の英語科目の導入によるものかの判断は難しい。平成25年度の参加者で年度末にTOEICテストを受験した学生は12名のみであったが、これらの学生のスコアは4月時点から平均45.43点上昇していた。平成26年度の場合、研修終了後にTOEICテストを受験した学生は27名であったが、これらの学生の平均点は4月時点から58.89点上昇していた。これらの結果を見れば、海外研修参加の効果はTOEICテスト結果にも反映されている。

2つ目の海外研修の事前・事後学習の内容は、語学学習というよりは、研修先でのコミュニケーション活動に役に立つ情報の準備である。自己紹介、家族の紹介、出身地の紹介など、現地の人やホームステイ先でのコミュニケーションに役に立つと思われる情報をまとめたものを準備させ（資料2参照）、学生同士でそれを紹介し合うことにより、予行演習をさせている。研修先の国や地域の基礎知識の情報を収集させるだけでなく、研修参加者が研修先で収集してくる情報リストも渡し、事後学習時

には研修先で収集した情報を学生同士で紹介し合うというものである。事後学習内容も、語学能力向上のための学習というよりは、研修地の人と積極的にコミュニケーションを取るための素材を与えるものである。

5.3 異文化理解力向上への取組

5.2で述べた事前・事後学習指導の効果は平成26年度の夏休みに海外研修参加者対象に行った事前・事後のアンケート調査で確認された。事前アンケート（資料3を参照）で、参加学生の語学力向上や異文化理解力向上への期待に関する質問項目を回答させることにより、参加学生の自覚を促すことを狙い、事後アンケートでは、事前アンケートの質問項目と同じ質問項目による事後の感触を回答してもらうことで、事前と事後の比較ができるようにした⁸。しかし、このようなアンケート調査では、往々にして事前の期待値が高く、事後の評価は低くなる場合が多い。また、日本人は「控えめに自己評価をする」傾向もあり、事前と事後では大きく評価が下がることも考えられる。

事前・事後アンケートの結果、「英語力の向上」の項目では、事前の期待値が3.96であったのに対し、事後の感触は3.5であった。「積極的にコミュニケーションを図る」という質問では、事前が4.26であったのに対して、事後は3.83であった。このように、事前の方が数値は高く、事後の数値は下がっていた。

その反面、「異文化体験をする」という質問項目では、事前の期待値が4.33であったのに対して、事後の感触は4.69と、事後の数値の方が高かった。「異文化理解力の向上」の項目では、事前が4.38、事後が4.2と、大きな数値の落ち込みはなかった。「チャレンジ精神の向上」という項目の場合も、事前が4.29であったのに対して、事後が4.19、「新たな交流のきっかけ作り」という質問の回答は、事前が4.5、事後が4.61であった。これらの結果から、海外研修による異文化体験は学生が期待する以上のものがあり、グローバル人材の要素である「チャレンジ精神」や「積極的な態度」へ自己変化の効果も見られる。この点については、アンケートで自由記述方式の質問への回答に特に顕著に表れていた。事前アンケートでの記述は回答者の28.6%の学生しか記述しておらず、その記述文は平均1.67行であった。それに対して事後アンケートの自由記述項目へは75%の学生が何らかの記述をしており、その記述文の長さの平均は2.55行であった。このような変化は学生自身ではあまり自覚ができないかもしれないが、指導教員には違いが把握できる。

6. 海外研修の効果と解決すべき問題点

海外研修の効果を厳密に調べ、その結果を誰もが納得するような形で示すことが難しいのは、海外研修の参加者がどのようなプログラムに参加し、どのような体験と過ごし方をし、どの期間にわたって参加したのかなどに、統一性が見られないからでもある。しかし、海外研修への参加者と非参加者

の比較や、参加者の参加前後の比較など、大まかな比較であれば可能であり、短期の海外研修には、語学学習へのモチベーションが上がるだけであっても、何らかの効果は「あり」と言えよう。長崎県立大学の国際交流学科の学生の場合 TOEIC のスコア、異文化理解力、チャレンジ精神、積極性などに効果が見られた。

教育は製造業や販売業とは異なり、新しい方法や指針を実施すればすぐにその効果が表れる類の業種ではない。教育の場合、その効果が表れるのには個人差があり、1カ月後、1年後や10年後、あるいは30年後に表れることさえある。したがって、長期的な視野で捉える必要があるが、海外研修は比較的短期間であっても、その効果があると思われる。それは、海外研修に参加することにより得られる異文化体験のインパクトが大きいからである。この点を考えると、やはり若い人には「内向き志向」から脱却し、異文化の実体験をしてほしい。10年後でも30年後でも良いので、海外研修参加がその人の人生にとって貴重な体験となるのであれば、それだけでもその効果があったと判断できる。また、数か月後に長期の海外留学を志すとか、海外で仕事をしてみたいというような積極性が出れば、効果があったと思われる。海外研修参加後に海外からの留学生への対応や、近隣に住む外国人へのかかわり方に変化があったとすれば、それも海外研修の効果であろう。このような数値では測れない効果があることを認めて良いのではないだろうか。

注)

1. 文部科学省「グローバル人材育成推進事業」(2012). http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/09/attach/1326084.htm および「スーパーグローバル大学創成支援」(2014) http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/sekaitenkai/1319596.htm など。(平成27年3月10日閲覧)
2. 短期海外研修の効果については、工藤和宏(2011). 短期海外研修プログラムの教育的効果とは—再考と提言—『留学交流』2011年12月号 Vol. 9, pp. 1-10. 木村啓子(2011). 「短期海外研修プログラムの効果と役割」『留学交流』2011年12月号 Vol. 9, pp. 1-7. Matsumoto, M. (2012). Effectiveness of Short-term Overseas English Study Abroad Programs, *VISIO No. 12*, pp. 1-10. 九州ルーテル学院大学、Kinging, G. (2009). *Contemporary study abroad and foreign language learning: An activist's guidebook for language education*. University Park, PA: C ALPAR Publications などの論文が発表されている。Shaftel, J. and Shaftel, T. (2011) Evaluation of Study Abroad Outcomes では異文化理解力に関する効果について、海外研修体験者と非体験者の比較を試みている。<http://cache.yahoofs.jp/search/cache?c=qUt9Uj0iJMwJ&p=evaluation+of+study+abroad+outcomes&u=https%3A%2F%2Fcete.ku.edu%2Fsites%2Fcete.drupal.ku.edu> (2015年3月10日閲覧)
3. 平成11年に「県立長崎シーボルト大学」に「国際交流学科」が開設され「海外研修」が選択科目

として導入された。その後、平成 20 年に佐世保の「長崎県立大学」と統合され、大学名は「長崎県立大学」となった。

4. このアンケート調査結果については、山内ひさ子・山田健太郎・三重野陽平(2014)「効果的海外研修プログラムの開発研究(1)」『長崎県立大学国際情報学部研究紀要 第14号』pp. 239-253 に詳しく報告した。
5. 経費は26年度の場合。円安により経費が25年度より大幅に増えているので、平成27年度の支援金は増額を検討中。国際交流学科以外の学生は「海外研修」が選択科目であるため、支援金額は半額。中国を第1外国語とする学生のほとんどが交換留学をすることから、中国への海外研修参加者はこれまでいなかったので、海外研修の事前・事後指導は英語圏への研修機関の研修に参加する学生のみであった。
6. 山内ひさ子(2008)「海外語学研修アンケート調査結果」JACET九州・沖縄支部研究大会提出アンケート調査資料(非出版冊子)
7. このデータは年3回行われるTOEIC IPテストのほか、公開テストの点数も大学へ登録するため、各学年の学生の取得最高得点の平均値である。卒業に必要な点数を取得した後、TOEICテストを受けない学生がいる。
8. このアンケート調査結果については、山内ひさ子、山田健太郎、ジョール・ヘンスリー、ニール・ミリントン、ブラッドリー・スミス(2015)「効果的海外研修プログラムの開発研究(2)」『長崎県立大学国際情報学部研究紀要 第15号』pp. 197-212 に詳しく分析・報告した。
9. アンケート調査ではLikert Scaleによる5段階評価を行ってもらい、事前と事後の数値の比較ができるようにした。

引用文献

- 木村啓子(2011). 「短期海外研修プログラムの効果と役割」『留学交流』2011年12月号Vol. 9.
- Kinginger, C. (Ed.). (2013). *Social and cultural aspects of language learning in study abroad*. Amsterdam: John Benjamins.
- Kinginger, C. (2009). *Contemporary study abroad and foreign language learning: An activist's guidebook for language educators*. University Park, PA: CALPER Publications.
- 工藤和宏(2011). 短期海外研修プログラムの教育的効果とは—再考と提言—『留学交流』2011年12月号Vol. 9.
- 国際交流センター(2014)「国際交流学科学年別TOEIC最高点リスト及び平均点データ(英語選択者)」
- Matsumoto, M. (2012). Effectiveness of Short-term Overseas English Study Abroad Programs, *VISIO No. 12*. 九州ルーテル学院大学、pp. 1-10.

- 文部科学省ホームページ (2012). http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/09/attach/1326084.htm (2015年3月10日引用)
- 文部科学省ホームページ (2014). http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/sekaitenkai/1319596.htm (2015年3月10日引用)
- 山内ひさ子 (2008) 「海外語学研修アンケート調査結果」 JACET 九州・沖縄支部研究大会提出アンケート資料 (非出版冊子)
- 山内ひさ子、山田健太郎、ジョール・ヘンスリー、ニール・ミリントン、ブラッドリー・スミス (2015) 「効果的海外研修プログラムの開発研究(2)」『長崎県立大学国際情報学部研究紀要 第15号』長崎県立大学国際情報学部、pp. 197-212.
- 山内ひさ子、山田健太郎、三重野陽平 (2014) 「効果的海外研修プログラムの開発研究(1)」『研究紀要』長崎県立大学国際情報学部、pp. 239-253.
- 山内ひさ子、山田健太郎他 (2013) 「平成24年度学長裁量教育研究費報告書：効果的海外研修プログラムの研究」
- 山内ひさ子、山田健太郎他 (2012) 「平成23年度学長裁量教育研究費報告書：国際交流学科の海外語学研修プログラム研究」
- 山内ひさ子 (2008) 「海外語学研修アンケート調査結果」 JACET 九州・沖縄支部研究大会提出アンケート資料 (非出版冊子)

資料1. 平成26年度「海外研修」(Study Abroad)のシラバス

担当教員：山内、ミリントン、スミス

使用教室：W204

授業の概要：海外留学研修の事前学習、海外研修体験、事後学習を行う。事前学習では研修場所の情報を入手し、ホームステイ家庭への自己紹介文を作成するなど、準備を行う。事後学習としては、研修終了後、研修内容、研修中の海外学習体験や生活体験などについて小グループを作り、プレゼンテーションを行う。

授業の目的：研修地において専攻している言語を実際に使用することにより、運用能力を高める。研修体験を通して異文化コミュニケーションを高める。研修体験について英語でプレゼンテーションできるようにする。

第1回	5月19日【月】	事前学習1：Course Introduction 【外研修ポートフォリオについて、先輩のアンケート結果、先輩の話を聞く】
第2回	6月2日【月】	事前学習2：現地学習準備1 【海外研修ポートフォリオ作成、自己紹介文の作成、日本文化などに関する説明文の準備】
第3回	6月15日【月】	事前学習3：現地学習準備2 【海外研修ポートフォリオ作成、研修地での異文化について、研修地の国、場所などの基礎知識を得る】
第4回	6月30日【月】	事前学習4：現地学習準備3 【海外研修ポートフォリオの決定、旅行の準備、ビザの申請、海外旅行保険の申請】
特別講義	7月14日【月】	外務省特別による特別講義 【海外研修のコツと注意】
第5回		研修地での研修
第6回		研修地での研修
第7回		研修地での研修
第8回		研修地での研修
第9回		研修地での研修
第10回		研修地での研修
第11回		研修地での研修
第12回		研修地での研修
第13回	10月6日【月】	事後学習1：研修体験プレゼンテーションの準備
第14回	10月20日【月】	事後学習2：グループ別研修体験プレゼンテーション
第15回	10月27日【月】	事後学習3：グループ代表による研修体験プレゼンテーション、授業のまとめ

成績評価の方法：

研修先からの評価 80%

研修体験ポートフォリオの作成、プレゼンテーション 20%

テキスト：

参考書：

履修上の注意：1年の半の研修から参加できる。TOEFL C450以上を敬請のこと。

研修場所は、アメリカ、イギリス、オーストラリア、カナダ、シンガポールから選択。

事前学習は学期中の6限目に行う。事後学習は帰国後行う。

資料2. 事前学習のワークシート例

長崎県立大学
UNIVERSITY OF NAGASAKI

Name: _____

My life at SUN.

Answer the following questions about your student life.

1. What is your major? _____
2. What subjects are you taking? _____

Write down some information about your weekly schedule here.:

Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
Morning				
Afternoon				
After classes				

3. What clubs or circles do you belong to? _____
4. Do you live by yourself? Do you share with other students? Do you live near campus?
Write down some information about this: _____
5. What do you enjoy the most about your student life? _____
6. What do you think is the best part about student life? _____
7. Do you work part-time? What kind of work do you do or have you done? _____

Now write a short summary of all the information above.:

資料3. 事前アンケート

平成26年度海外研修 事前アンケート

「短期海外語学研修」に参加するに当たり、あなたは何を期待していますか。
次の5つのスケールであてはまるものに○をつけてください。

1. 英語力が向上する。
 1. 全くそうは思わない
 2. そう思わない
 3. どちらでもない
 4. そう思う
 5. 強くそう思う
2. これまで自分が学んできた英語力を試す。
 1. 全くそうは思わない
 2. そう思わない
 3. どちらでもない
 4. そう思う
 5. 強くそう思う
3. 自分が積極的に英語でコミュニケーションを図るようになる。
 1. 全くそうは思わない
 2. そう思わない
 3. どちらでもない
 4. そう思う
 5. 強くそう思う
4. 現地で新しく知り合った人と、英語でコミュニケーションを楽しむ。
 1. 全くそうは思わない
 2. そう思わない
 3. どちらでもない
 4. そう思う
 5. 強くそう思う
5. 現地で異文化体験をする。
 1. 全くそうは思わない
 2. そう思わない
 3. どちらでもない
 4. そう思う
 5. 強くそう思う
6. 自分の異文化理解力が向上する。
 1. 全くそうは思わない
 2. そう思わない
 3. どちらでもない
 4. そう思う
 5. 強くそう思う
7. 異文化の人との積極的にコミュニケーションをする自分のチャレンジ精神が向上する。
 1. 全くそうは思わない
 2. そう思わない
 3. どちらでもない
 4. そう思う
 5. 強くそう思う
8. 異文化の人と新たに交流を始めるきっかけを作る。
 1. 全くそうは思わない
 2. そう思わない
 3. どちらでもない
 4. そう思う
 5. 強くそう思う
9. 現地の風景や現地の人々の生活を観察する。
 1. 全くそうは思わない
 2. そう思わない
 3. どちらでもない
 4. そう思う
 5. 強くそう思う
10. その他、海外研修であなたが期待することを書いてください。